

NPO法人・越谷市郷土研究会

## 第445回 史跡めぐり

平成26年1月5日（日）

# 『千寿七福神めぐり』



足立区立郷土博物館作成のパネル展「千住歴史大全」より

大黒天  
布袋尊

毘沙門天  
弁財天  
恵比寿神

福祿寿  
寿老神



銭湯「タカラ湯」の彫刻、  
七福神の宝船

# 「千寿七福神」 “千住宿の知られざる歴史に触れながら詣でる”

案内者 加藤幸一

平成26年1月5日(日) 8:20 越谷駅東口集合

コース(7.0キロ)

越谷駅(8:43)→北千住駅(9:01)→2金蔵寺(千住の投げ込み寺)→3森鷗外旧宅跡→4日光街道→5問屋場→6熊谷堤→7高札場・一里塚跡→10中千住駅跡→11ミリオン通り(ミリオン座映画館跡)→12仲町氷川神社(弁財天)→13帰部堤(桜土手、現・墨堤通り)→15やっちゃ場(青物市場)跡→17大師道(西新井大師・岩槻道)→18河原稲荷神社(福祿寿)→19.熊谷堤(旧・区役所通り)→21白旗八幡神社(毘沙門天)→22千住神社(恵比寿天)→30元宿神社(寿老神・千住宿の元)→33大川氷川神社(布袋尊)→34下妻道→36水戸街道→40ほんちょう公園(千住宿案内モニュメント)→42本氷川神社(大黒天)→43検番通り・44本陣跡→北千住駅(12:30解散)

## 1. 見番横丁と現在の駅前通り・・・浅川医院(中田屋跡)前の道が見番横丁、かつての駅前通り

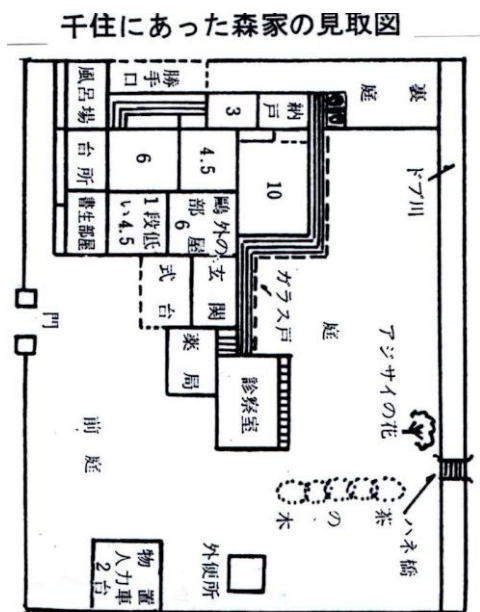
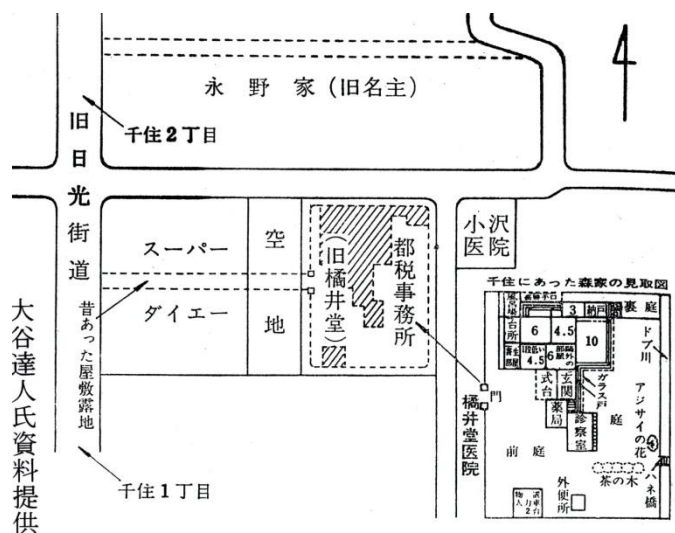
現在の北千住駅の駅前通りは昭和8年にできた。その前の駅前通りは明治29年12月にできた見番横丁(見番横丁)である。この年に日本鉄道土浦線(現在の常磐線)の北千住駅ができ、明治32年8月には北千住と久喜間に東武鉄道が開通している。

## 2. 金蔵寺(こんぞうじ)・・・千住の投げ込み寺

千住宿の病死して行き先のない飯(めし)盛り女たちの埋葬寺でもある。「南無阿弥陀仏」と刻まれた遊女たちを供養した供養塔がある。その供養塔の正面の、向かって左下隅には越谷市大泊の安国寺の中興と呼ばれた宏善上人(こうぜんしょうにん)の名が刻まれている(「宏善(花押)」)。安国寺には、遺徳の偉大さが偲ばれる宏善上人の巨大な供養塔がある。飯盛り女とは、宿場の宿屋で、客の給仕もし、売春も兼ねた女のことで、宿場女郎、食売女ともいう。いわゆる遊女のことである。

千住宿には、大名が泊まる本陣・脇本陣の他に、55軒の旅籠屋(はたごや)があり、そのうち遊女屋(飯盛旅籠、食売旅籠)が36軒あった(明和元年1764)。

## 3. 森鷗外旧宅跡・・・・・・・・森鷗外が住んだ旧宅跡



「足立の史話」(勝山準四郎著)より抜粋

ここに森鷗外の父が開業した橘井堂（きっせいどう）があり、森鷗外はここから三宅坂の陸軍病院まで人力車でかよい、ここで、本名の森林太郎の名で文筆活動を始めた。

森家の道路反対北側は、千住二丁目の名主である永野家である。

#### 4. 日光街道の千住本宿・・・現・千住本町[ほんちょう]商店街の通り

日光道中の千住宿の内、本宿（ほんじゅく）の地域。本宿は、現在の本町（ほんちょう）にあたり、熊谷堤から一丁目が始まり、五丁目（日光街道の下妻道との追分）まで続く。

#### 5. 問屋場・貫目改所・・・街道筋の宿場にある問屋場と、千住宿に置かれた貫目改所の跡地

街道筋の旅行者や荷物運送のために人馬（じんば）の継ぎ立てなどをおこなった問屋場（といやば）と、運ぶ荷物が何貫目かの重さをはかった貫目改所（かんめあらためどころ）があった跡地である。人馬の継ぎ立てとは、宿場に着くごとに、備え付けてある馬に乗り替え、人足を新たに雇うこと。貫目改所は、大名や武士が法外な重さの荷物を負わせるのを防ぐのがきっかけで千住宿に設置された。

#### 6. 旧熊谷堤（現・旧区役所通り）・・・熊谷から続く、荒川（下流は隅田川）沿いの堤土手

熊谷堤（くまがやづつみ）は、熊谷方面からずっと続く荒川左岸の堤土手（つつみどて）である。荒川堤ともいう。荒川左岸地域の洪水を防ぐために江戸時代前の天正年間に築かれた。北にある現在の荒川放水路は、昭和5年（1930）にできた人口の川である。

この熊谷堤までが最初にできた千住宿（千住本宿）である。一丁目から五丁目までである。千住本宿一丁目より南の千住宿は、後に広がった千住宿で、仲町（なかちょう）、河原町（かわらちょう）、それに荒川（現・隅田川）を越えた小塚原町（こつかばらちょう）、中村町がある。

なお、千住大橋（初期の頃は、小塚原橋とも呼ばれ、現在の橋より上流200メートルの所にあつた）の下流の鐘ヶ淵を境に、上流は荒川、下流は隅田川と呼んだ。

#### 7. 一里塚・高札場・・・街道の両側にあつた一里塚と

その角にあつた高札場

一里（4キロ）ごとに築かれ、旅人の目印や休息場となつた一里塚は、街道の両側に一対あつた。その東側の片方に高札場が設置されていた。ここから先（北側）が最初にできた千住宿である。

高札は、人目にひく所に高くかけた立札のこと。

#### 8. 旧南足立郡の郡役所・旧足立区役所跡・・・

郡役所や区役所が置かれたところ

ここに、かつての南足立郡の郡役所、後の足立区役所（昭和7年）が置かれた。現在は、東京芸術センター。区役所前の道（かつての熊谷堤）が「区役所通り」と呼ばれた。足立区役所は、平成8年（1996）に中央本町一丁目に移転されている。

#### 9. 掃部宿（現・千住仲町商店街）・・・掃部堤ができた後に千住宿の一部に含まれるようになる。

万治元年（1658）に千住宿の一部となつた掃部宿とは、特に仲町をさし、仲町は明治から昭和にかけて千住で最も栄えた繁華街。

#### 10. 中千住駅・・・北千住駅と牛田駅の間にあつた駅

「大踏切」を越える手前の踏切南側の線路（千住東[あずま]1丁目23番地）の地に中千住駅があつた。大正13年にできた当初は「千住駅」、昭和5年から「中千住駅」と改称、戦後廃止された。

なお、西千住駅が京成電鉄の千住緑町（緑町2-7）に昭和10年にできたが、戦後廃止された。



11. ミリオン通り・・・・・・・・・・かつてミリオン座映画館があった通り

ミリオン映画館は、現在、千住庁舎になっている。その前の通りがミリオン通りである。

千住には映画館が多く見られた。千住東映（千住5-26）、千住東宝（千住3-66）、千住日活（千住3-74）、それにミリオン座（千住仲町19）である。

12. 仲町氷川神社・・・・・・・・『弁財天』

氷川神社の境内にある市杵島（イチキシマ）神社の岩の祠の中に安置されている。庚申塔の主尊を弁財天とするのはとても珍しく、東京にはここにしかないという。昭和58年12月に足立区の登録有形民俗文化財に指定された。右手に剣、左手に宝珠を持つ主尊の上部には「奉造立辨財天尊像一躰」と刻まれている。下には三猿が刻まれている。



弁財天像庚申塔

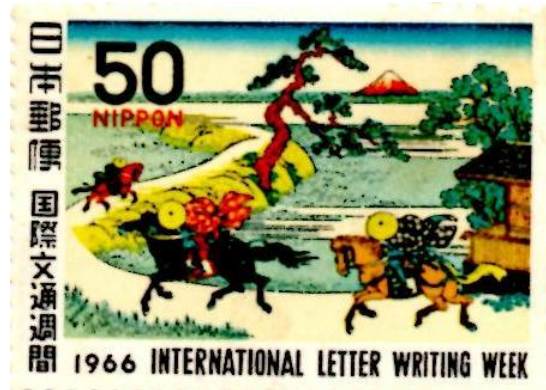
なお、市杵島姫は日本神話に出てくる女神で、宗像三女神の一人である。市杵島姫は、後の仏教の弁財天と習合して、俗に弁財天とも呼ばれるようになる。また、巖島神社のイツクシマとは、イチキシマがなまったものであるという。

13. 旧・掃部堤（桜土手、現・墨堤通り）・・・・荒川の熊谷堤の広大な河川敷に掃部亮が築いた堤

荒川水除堤（みずよけつつみ）として築かれ、熊谷堤からここまでが、千住宿の仲町となる。

この掃部堤には、明治の中頃に桜が植えられ、後に「桜土手」と呼ばれ、昭和の初め頃まで堤の両側にある桜並木として栄えた。

右の記念切手は、葛飾北斎の「富岳三十六景隅田川関屋の里」で、関屋から掃部宿方面を眺めた江戸時代の掃部堤である。遠くに富士山が見られる。堤上にあった関屋の一軒茶屋（京成関屋駅北口の北島タバコ店）より眺めたと推定されている。なお勝山準四郎著「足立の史話」30頁によると、「吉胤が築いた当時の高さは一丈三尺（約四メートル）・・・・、その後のかさ上げ工事でさらに高くなり、・・・・堤外の河原町の町外れには、土手下まで芦が繁茂し、よしきりの鳴き声がかん高く響いて、土手らしい風情があった。この土手も[荒川]放水路が完成し、荒川の氾濫が予防されたので水除堤の役割を果たし終わり、昭和六年頃から約一メートル程高さを削り取り、その土で両側を埋めて道路を広くし今日の道路に変身し、その時に桜並木も姿を消したのである。」と記述され、掃部堤がかつては右上の絵のように土手としての風情があったことが想像できる。



掃部堤（かもんづつみ）

14. 石出掃部亮吉胤の墓（源長寺）・・・・掃部堤を築いた人の墓

石出掃部亮吉胤（いしでかもんのすけよしたね）は、江戸時代初期、千住大橋や掃部堤築堤等に尽力した地域の先駆者として語り継がれている。源長寺は、本来吉胤が慶長十五年に創建したが、伊奈備前守忠次（いなびぜんのかみただつぐ）に開基の名を譲った。（足立区教育委員会の解説板より一部分抜粋）千住大橋は、伊奈忠次を普請奉行とし、そのもとで石出掃部亮吉胤が創架したものである。

15. やっちゃ場（河原町）・・・・河原町の日光街道沿いにみられた青物市場

千住青物市場は、『やっちゃ〜、やっちゃ〜（やっちゃい、やっちゃい）』との掛け声が聞こえたこ

とから通称「やっちゃ場」と呼ばれた。河原町は、かつて青物や川魚、米穀の市場が栄えた所であった。

「千住の市場は、卸売市場として発展してきました。特に、野菜を扱う青物問屋が集中した千住河原町一帯は“やっちゃ場”と呼ばれました。街道沿いに敷かれた石畳と重厚なつくりの問屋建築が特徴であり、取引金額や数量、敷地面積のどれをとっても東郊最大の規模と賑わいを誇りました。商品は競売(セリ)によって取引され、投師(なげし)と呼ばれる、仕入れた荷物を他の市場で



売の人たちが活躍しました。“やっちゃ場”の問屋の様子は、足立区立郷土博物館で復元しています。現在、やっちゃ場の通りには、旧問屋の屋号や商売をあらわす看板やプチテラスがあり、往時の様子を伝えています。」(平成25年、足立区立郷土博物館作成のパネル展「千住歴史大全」より抜粋)

#### 16. 千住宿歴史プチテラス・・・千住宿に関する展示見学と千住宿散策の休息所

建物は、千住五丁目にある地漉き紙問屋の横山家の土蔵(内蔵うちぐら)を移築。

#### 17. 追分・大師道(岩槻道)・・・日光街道の河原町から西新井大師に行く道、江戸時代の岩槻道 追分とは、牛馬を追い、分ける場所ということから由来するという。

#### 18. 河原町(かわらちょう) 稻荷神社・・・『福祿寿』、やっちゃ場の鎮守様

やっちゃ場の鎮守さまでもあり、やっちゃ場の碑(「千住青物市場創立三百三十年祭記念碑」)や大きな石の灯籠がある。大師道側に鳥居があり、本来の正面である。

#### 19. 熊谷堤(桜土手、現・墨堤通り)。

千住宮元町交差点より西への西新井橋方面にいく都電があった。この墨堤通りの土手道に明治の中ごろ桜が植えられ、大正末年まで道の両側に桜並木があって「桜土手」の愛称で親しまれ、多くの花見客で賑わった。しかし、関東大震災後は衰退していった。

千住宮元町交差点そばの桜土手の北側に千寿小学校があるが、当時、千住第二小学校(通称、「土手の学校」)だった頃の思い出話がある。以下は、「千住物語」[www.senjumonogatari.com/sakura2003.htm](http://www.senjumonogatari.com/sakura2003.htm)より写真も含み抜粋。



「学校(現・千寿小学校)の前の通りは、土手になっていて、掃部堤といって、関屋から橋戸町・仲町を通り緑町・桜木町を通過して西新井橋に行く、大切な道でした。学校のまわりは、田畑で、五・六軒の農家が転々とあるだけでした。夜は、はるかかなたの三河島から町屋方面の農家の明かりが見えました。土手には、桜が植えられ、春は花が咲き、桜のトンネルとなりました。桜の花は、江北橋あたりまでつづき、花見のときは、人手が多く、車止めとなりました。春の花見、夏の夕涼み、秋の月見など人々には、なじみぶかい土手でした。」

#### 20. 千葉灸治院跡・・・坂本龍馬の婚約者千葉さな(一生独身)が経営した千葉灸治院跡

坂本龍馬の婚約者の千葉さなが経営した千葉灸治(きゅうじ)院は、北辰一刀流の祖千葉周作より子・孫と伝授されてきたもので、戦前は大師道の現在の仲町1-1にあったが、戦争中に強制疎開をして仲町3番7号に移転、平成12年まで営業していた。(大谷達人氏所蔵「南足立郡誌」66頁と、インターネット「千葉さなと千住中組の千葉灸治院」を参照、「NPO法人千住文化普及会」が建てた詳細な解説版あり)

## 21. 白旗八幡神社・・・『毘沙門天』、源氏ゆかりの神社

足立区の各地に残る源八幡太郎義家の奥州征伐の伝説の一つがこの八幡様で、義家が現在の隅田川を渡る際、兩岸に源氏の旗である白旗（しらはた）を立てて目印にしたことより、白旗の八幡様と呼ばれているという。平氏の旗は赤である。

## 22. 千住神社・・・『恵比寿天』、回転する願掛け恵比寿、旧千住町の総鎮守

千住宿ができると、千住宿の西にあるので「西の森」とか「西の宮」と呼ばれた古くからあった神社。熊谷堤沿いにあり、戦前までは樹木がうっそうとしていた所で、平安時代の開拓当初は、このあたりは丘陵の地で、原始林が広がっていたと推定されている。奥州征伐に現在の隅田川を渡った源義家がここで戦勝祈願し、また、江戸時代には、代々の将軍が鷹狩りに来ている。

以下は、足立区教育委員会の解説板より抜粋。

「およそ一千年前、この地は千崎（せんざき）という丘陵で、原始的森林地帯であった。やがて開拓民がここに住みつき、延長四年（926）に稲荷の神を勧請（かんじょう）し、石造の祠を建て、千崎稲荷神社として五穀の豊作を祈願した。弘安二年（1279）氷川神社を勧請したので、二つの神社が原始林の中に並び、「二つ森」とも言われて住民の信仰を集めた。

江戸の初期、日光街道が開通すると、千住は初宿となり、宿場の西方にある神社ゆえ、西の森と唱えられた。明治六年、千崎稲荷神社と氷川神社を合祀（ごうし）して、西森神社と号し大正四年に、千住神社と改称した。（後略）」

## 23. 竜田道と大正通り・・・竜田町方面に通じる古道と、大正年間にできた新道

熊谷堤（大師道）から竜田方面に分かれる道である。その南側にある大正通りは、大正5年に西掃部堀が埋め立てられてできた道路で、「大正記念道」が正式名称。森鷗外によっていきさつが書かれた「千住大正記念道碑」が墨堤通り（熊谷堤）と大正記念道の追分（おいわけ）にある。

## 24. 追分（熊谷堤と掃部堤）・・・掃部堤は、ここから熊谷堤と分かれ関屋で合流、近くにお竹の渡し

掃部堤は、ここ千住竜田町交差点から関屋までの全長2キロ、高さ4メートルの江戸時代初期にできた堤である。熊谷方面から続く熊谷堤は、江戸時代以前にできた堤である。熊谷堤は、関屋で掃部堤と合流（牛田駅の西の踏切あたり）し、京成関屋駅の北口及び南口の道路を通過し、現在の墨堤通りにつながる道と思われる。近くに対岸の町屋とを結ぶ「お竹の渡し」跡（尾竹橋の由来）がある。

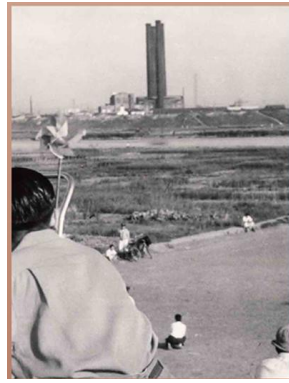
## 25. 追分（大師道と川口道）・・・桜土手の熊谷堤は川口道、そこから分かれる道が大師道

桜土手の熊谷堤から右に分かれる道が大師道である。川口道は、桜土手の熊谷堤を直進し、現在の荒川放水路の西新井橋の東側を北西方向に斜めに横断し、江北橋方面につながる。

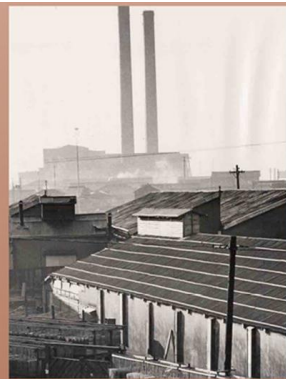
## 26. お化け煙突・・・見る場所によって一本から四本まで変化して見られた

千住神社から熊谷堤を北に進むと、前方にお化け煙突がよく見えた。以下は足立区立郷土博物館作成のパネル展「千住歴史大全」より抜粋。都内見学の観光バスや遠足では必ず紹介された四本煙突。

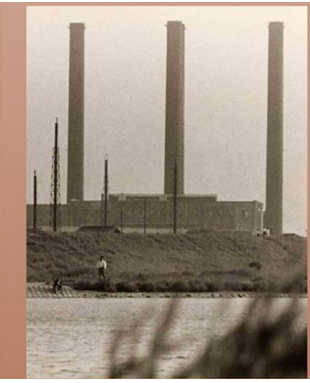
「通称お化け煙突と呼ばれた千住火力発電所の四本煙突は、大正15（1926）から昭和39（1964）年まで、千住のシンボルでした。この煙突は、見る方向によって、本数が変わって見えることで有名になりました。千住火力発電所は、足立や付近の工場へと電気を供給し、東郊の近代工業を支えました。撤去されてもうすぐ50年を迎えますが、今なお、小説や漫画、映画の世界などを通して、多くの人々に親しまれています。解体後の素材の一部を利用したモニュメントが帝京科学大学の千住キャンパス（千住桜木2-2-1）にあります。」帝京科学大学は元宿（もとじゅく）小学校の跡地。



一本煙突



二本煙突



三本煙突

足立区立郷土博物館作成のパネル展「千住歴史大全」より

### 27. 堰稲荷・・・「お化け煙突」の守護神としても拝まれた神社

昭和39年（1964）に閉鎖された東京電力千住火力発電所のお化け煙突を守る「千住四本煙突守護社」としても参拝された。「堰」とは、元宿塚（もとじゅくいり）の水門をさすのであろう。

大師道との追分にあった「是より西、弘法（こうぼう）大師道」と刻まれた道しるべがここに移されている。弘法大師とは空海のことである。



### 28. 元宿堀跡・・・隅田川に通じる堀があった

隅田川に通じる堀があって船の出入りがあり、江戸時代、富嶽三十六景の浮世絵も描かれた

「江戸時代、ここには荒川（後の隅田川）につながる水路があり、元宿塚（もとじゅくいり）と呼ばれました。

葛飾北斎の「富嶽三十六景・武州千住」は、この場所から描かれたと推定されています。堰の前にネギを運ぶ馬子（まご）、水路に釣り糸を垂れる人たち、その先に荒川（後の隅田川）と思われる河川と富士山が描かれています。昭和十年頃までの元宿堀は、荒川（通称隅田川）への船の出入り口で、付近に十数人の船頭衆が住み、小さな港のようでした。



その後、公共下水道が整備されたことにより元宿堀はその役割を終え、昭和四十五年に水路は埋め立てられ、平成二十二年の道路改良工事等を経て現在の形になりました。

平成二十四年六月 足立区

### 29. 大師道から分かれる川田道・・・古くから開けた旧地名の「川田」地域を通る古道

タカラ湯の前の道が古くからの古道である。

### 30. 元宿（もとじゅく）神社・・・『寿老神』

千住宿ができる前から人々が住んでいた川田と呼ばれる地。

古奥州道の通る道で、江戸時代は千住宿に対して元宿と呼ばれた。

「元宿神社 千住元町三三一四 祭神 誉田別命（ほむたわけのみこと、八幡神）・宇迦之御魂命（うがのみたまのみこと、稲荷神）」

この地は鎌倉時代既に集落ができていた古い土地で、奥州路もここを通っていたといわれ、江戸時代初期の日光道中開設とともに成立した『千住宿』に対し『元宿』と称していた。天正の頃、甲州から移ってきた人々によって、北部の川田耕地などが開墾され、その人々の守護神八幡神が鎮守としてここに祭られたという明治末年、一時千住四丁目氷川神社に合祀されたが、昭和五年稲荷神を合祀して村社となり、再び元宿の鎮守となった。荒川放水路の開削により、祖先が苦心して開拓した耕地は河川敷きとなり、多くの人々は悲しくも故地を離れねばならなかった。それらを記した境内の『感じ旧碑』は足立区内の開拓の歴史の貴重な資料である。平成十七年三月 足立区教育委員会

「**感旧碑**（現代語訳） 我が祖先、因幡守貞宗は、長享元年、武田氏に仕え、甲府に住んでいました。長男蔵人は大永六年、武州安達郡に移り、さらに陸羽街道『元宿』に転居しました。その子左エ門尉信義は、天正元年（1573）、この地を開墾し、多くの良田を得ました。翌二年八月、村の東南に八幡神祠を、九月東北に稲荷神祠を建てました。この信義は戦にも才能を発揮し、徳川に仕え、幾度となく功績をあげ、天正・慶長の時には、功状を賜ること三度、今尚、当家に伝わっています。この地に移転当初は、一族二十四戸でした。しかし、元禄二年、そのうち二十戸が今の千住四丁目一帯に移り住み、僅か四戸しか残りませんでした。後に十四戸までになり、全戸代々農業を営んできました。天明七年（1787）の飢饉の時も、先祖代々の土地を固守して、この地を去ることなく、明治四十年～四十三年の大洪水の時は、家屋に浸水すること十余日、田圃もほとんどが被害にあい荒廃しましたが、それでも村から離れず死守して来ました。大正元年八月、内務省が荒川改修工事をおこなうことになり、この村もその改修区域に入っていたので、先祖伝来の土地を十四戸分すべて国に提供し、その後一族は四散してしまいました。我が一族が、この地に移り住んで四百余年、私は貞宗の遠い子孫になりますので、今この地を去るにあたり愛慕の情を禁じ得ず、碑を八幡神社に建てその概要を記して末代に伝えたいと思います。大正五年次丙辰三月 貞宗遠孫 鈴木与吉建立

平成十八年丙戌三月 元宿神社」

### 31. 銭湯「タカラ湯」の七福神の宝船の彫刻（表紙の下部の写真を参照）

七福神の宝船の彫刻が入口正面上に見られる。この前の道が「川田道」と呼ばれる古道である。

千住は実に銭湯の多い町で、ここから国道四号線にかけては、タカラ湯、金の湯、大黒湯、ニコニコ湯があり、北千住駅の東口方面には、旭町梅の湯、美登利湯、大和湯、松の湯がある。

### 32. 旧・大川町公園（現・千住公園）・・・これより南の千住柳町の地域はかつての昭和の花街跡

明治に森鷗外の父が院長を勤めた郡立病院があった。これより南の竜田道と大正通りに挟まれた千住柳町の地域は、大正半ばより遊郭があった。千住宿の日光街道沿いにバラバラにあった飯盛旅籠が、大正10年に千住柳町の地域に移転されて、千住柳町に花街（はなまち、遊郭）が誕生したのである。

### 33. 大川町氷川神社・・・『布袋尊』、ここに旧・千住新橋の標柱が残されている

「この石柱は、旧千住新橋の親柱である。千住新橋は、明治四十四年から荒川放水路の大改修計画の一環として、大正九年より同十三年までの永い歳月と、一一九万円を費して完成したものである。橋の構造、規模は、長さ四五・二メートル、幅七・二メートル、鋼板桁の近代橋であった。その後、昭和三十二年に幅一七メートルに拡幅され、東北地方への玄関口として機能を果たしてきたが、堤防の嵩（かさ）上げ、著しい橋桁の老朽化、さらに交通量の増大などで架け替えをすることとなったのである。架け替えに当たり永年親しんできた旧千住新橋の標柱を大川町東町会の要請により、氷川神社の協賛を得て記念のためこの地へ移したものである。昭和五十三年十二月 東京都足立区」



34. 追分（日光街道と下妻道）・・・越ヶ谷宿を通る日光街道と奥州古道と思われる下妻道

千住宿の北のはずれにある追分、北に直進する道が下妻道、越ヶ谷を通る奥州古道と思われる。北西に分かれる道が日光道中で、現在の荒川放水路を斜めに横断し、北に進路を変えて越ヶ谷を通る。

35. 名倉医院・・・千住の「ほねつぎ」として江戸時代から知られる名倉の出身地は越ヶ谷市大泊村。

千住のほねつぎの名倉として有名。「名倉」といえば、ほねつぎ（接骨院）の代名詞になる程であった。今でも名倉と名乗る接骨院がよくみられる。足立区教育委員会の電話帳での調査によると、全国で265軒あるという。名倉接骨院の発祥地といえる。

名倉は大泊村よりやってきた人で、現在の大泊観音堂の西150m辺りにあったという（高崎力氏）。

36. 水戸街道（水戸佐倉道）

日光道中から分かれる追分にある。現代の国道6号線にあたる。

37. 銭湯「梅の湯」・・・千住本町にある

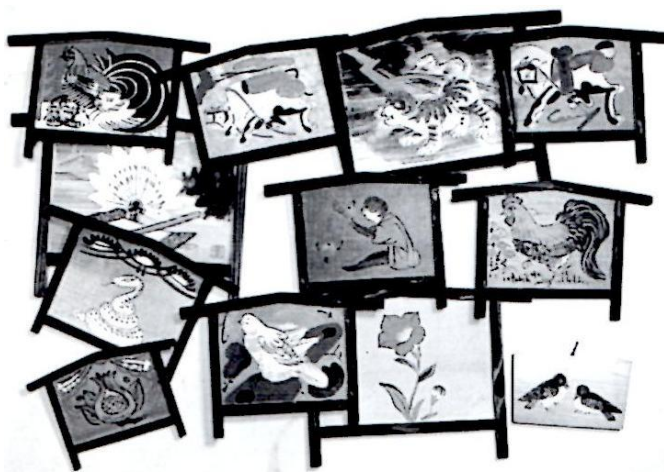
唯一の銭湯

平成23年の東日本大震災（3.11）の時、屋根が破損し、それがきっかけで営業が終了した。

38. 千住の絵馬屋・・・江戸時代から続く、

都内で唯一の手書きの絵馬屋

千住絵馬として知られ、経木（きょうぎ、木材を紙のように薄く削ったもの）に胡粉（ごふん）を塗り、極彩色の泥絵の具で、吉田家の家伝の図柄を描いている。



足立区立郷土博物館作成のパネル展「千住歴史大全」より

近くの長円寺の道路沿いの地藏堂には千住絵馬がぎっしりと奉納されている。

39. 地漉き紙問屋「横山家」・・・宿場町に見られた伝馬（てんま）屋敷の面影が残る

「宿場町の名残として、伝馬（てんま）屋敷の面影を今に伝える商家である。伝馬屋敷は、街道に面して間口が広く、奥行きが深い。戸口は、一段下げて造るのが特徴である。それは、お客様をお迎えする心がけの現れという。敷地は、間口が十三間、奥行きが五十六間で鰻の寝床のように長い。

横山家は、屋号を『松屋』といい、江戸時代から続く商家で、戦前までは手広く地漉紙（じすきがみ）問屋を営んでいた。現在の母屋は、江戸時代後期の建造であるが、昭和十一年に改修が行われている。間口が九間、奥行きが十五間あり、大きくてどっしりとした棧瓦葺（さんがわらぶき）の二階建である。広い土間、商家の書院造りと言われる帳場二階の大きな格子（こうし）窓などに、一種独特の風格を感じる。上野の戦いで、敗退する彰義隊が切りつけた玄関の柱の傷痕や、戦時中に焼夷弾が貫いた屋根など、風雪に耐えてきた百数十年の歴史を語る住居である。

平成二年十月 東京都教育委員会 ※伝馬屋敷とは、宿場の伝馬役という負担をした街道筋の屋敷

40. 千住ほんちょう公園・・・戦時中、ここに防空空地（ぼうくうくうち）が作られた。

戦時中は、ここは強制疎開されて防空のための空き地になっていた。戦後、足立区役所の出張所ができた。現在は、通称「たこ公園」と呼ばれる公園になり、千住宿案内モニュメントが設けられている。高札場の形をまねた千住宿の案内板「千住宿 高札場 由来」がある。文禄三年（1594年）に千住大橋が架けられると急速に発展し、慶長二年（1597）に人馬引継が行われ、寛永2



## 参考資料

千住宿とは（大谷達人氏作の「日光道中千住宿ガイド便覧」より抜粋、[ ]内は加藤の加筆）

「小田原征伐後、徳川家康は穢土に移封され、関八州をほぼ支配下に治めるが、文禄3年（1594）、千住大橋※1が架かると千住は急速に発展し、慶長2年（1597）には人馬継立の地になる。慶長8年（1603）、江戸開府に伴い、幕府直轄地となり、淵江領の名で伊奈郡代治世下に置かれ、寛永2年（1625、3代家光代）には五街道の整備によって日光・奥州両道の初宿に指定される。荒川北岸部にあった足立郡千住村は古くから水上交通の要所とされ、戦国時代には享徳の乱で下総国を追われて武蔵石浜城に拠点を移していた元の千葉市嫡流（武蔵千葉氏）が支配していた。

千住宿は、武蔵国足立郡・豊島郡の荒川（現・隅田川）曲流部に位置し、日本橋より浅草橋・蔵前通り・山之宿[やまのしゅく、街道沿いの花川戸1・2丁目と浅草6・7丁目]・新鳥越橋[山谷堀に架かる橋]・小塚原を経て千住大橋に至る。水戸街道は千住宿から分岐した。その後も町域は広がり、万治元年（1658、4代家綱代）に隣接する掃部宿[かもんじゅく、現・仲町]・河原町[やっちゃ場]・橋戸町が、寛文元年（1661）には荒川[現・隅田川]南岸の豊島郡峽田（はけた）領側の小塚原町[こつかっぱらちょう]と中村町が加宿され（淵江領に組み入る）、8ヶ町[「千住八ヶ町」※2]を総称して千住宿と云った。」

※1. 千住大橋は、家康が江戸に入府してから四年後、伊奈備前守忠次（いなびぜんのかみただつぐ）のもとで石出掃部亮吉胤による最初に荒川（現・隅田川、当時は入間川）に架かった橋。

※2. 千住本宿（ほんじゅく）一丁目（現・千住一丁目）、千住本宿二丁目（現・千住二丁目）、千住本宿三丁目（現・千住三丁目）、千住本宿四丁目（現・千住四丁目）、千住本宿五丁目（現・千住五丁目）、以上の千住本宿（現在の千住本町[ほんちょう]）五町と掃部宿（広義では河原町と橋戸町も含む）、さらに荒川（現・隅田川）以南の加宿の小塚原町、中村町、合わせて八ヶ町をさす。道中奉行の管轄下にあった。河原町・橋戸町は、掃部宿の堤外地である。

宿場外れには、小塚原刑場が設置されている。明治になると、千住本宿は千住宿北組、掃部宿は千住宿中組、現・隅田川の南側は千住宿南組となる。そこから、北千住、中千住、南千住の名称が聞かれるようになる。

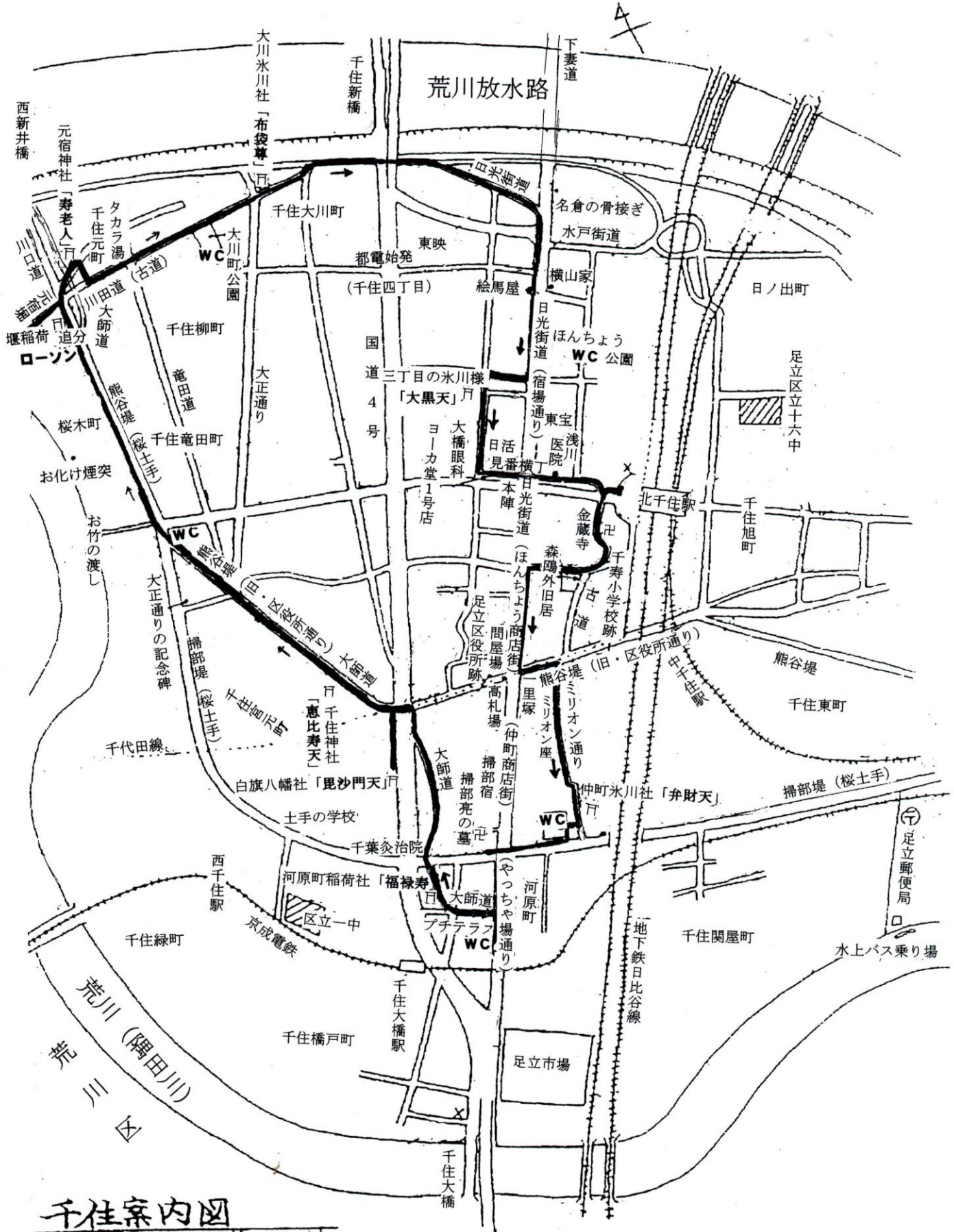
千住宿は江戸四宿（ししゅく）では最大の人口を抱えていた。一万人弱（天保15年）で、次が品川宿の7千人弱。旅籠屋の数では交通量の多い東海道を控えた品川宿（天保15年現在、93軒）が最大。日光街道の千住宿（55軒）は、中山道の板橋宿（54軒）と同程度。甲州街道の内藤新宿は24軒である。

### 本来の七福神詣で（大谷達人氏より）

「江戸時代の七福神巡りは、新年からの景気の良さを表すものであり、お祭りと同じで雑踏の中に混じって参詣することに意義を求めていたのではないのでしょうか。七福神巡りを考案し広めた江戸時代の文人墨客などは神社仏閣に参詣する信仰心は表向きの理由で、本心は同好の士と宴を繰り広げ自身の藝を披露しながら、且つ時代を諷刺したり没頭分野を蕩々と述べ大衆と意見を交わすことで、1年の始まりを、粋を愉しんだものようです。三箇日での参詣が叶わなかった人が幕の内に間に合わせて出掛けたようです。今日でも多くの七福神巡りは松の内を目安に開かれております。」



「荒川改修工事平面図」(明治の終わり頃)  
 原図に、地名、川名、道名を加筆(加藤幸一)



**千住案内図**  
 平成17年12月20日 安藤義雄作成

安藤義雄氏作成の「千住案内図」の原図を元にして作成しました (加藤幸一)。